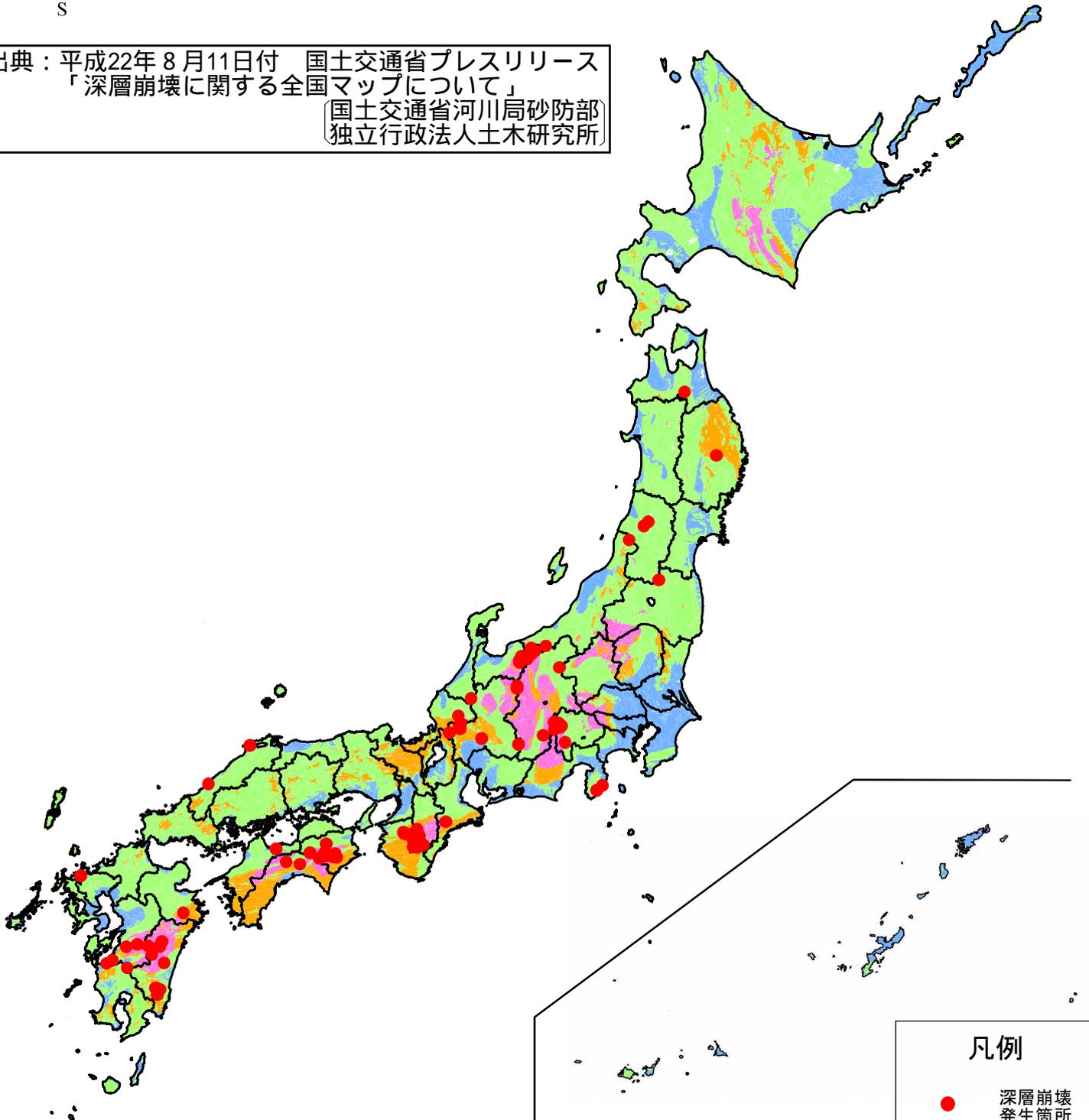




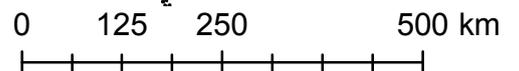
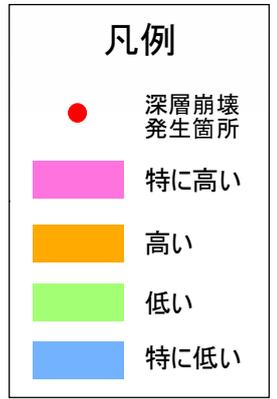
深層崩壊推定頻度マップ

出典：平成22年8月11日付 国土交通省プレスリリース
「深層崩壊に関する全国マップについて」
(国土交通省河川局砂防部
独立行政法人土木研究所)



※注釈

1. 全国の深層崩壊の事例を収集し、過去深層崩壊が多く起こっている地質及び地形(隆起量)の範囲を図化したものである。
2. 深層崩壊の収集にあたっては、明治時代以降に豪雨または融雪により発生したもののうち、比較的規模の大きいもの、精度の良い記録が残っているものを対象とした。
3. 用いた地質図は独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター発行の「日本地質図第3版CD-ROM 第2版」(縮尺100万分の1)である。
4. 用いた隆起量図は、第四紀地殻変動研究グループ(1968)作成の「集成隆起沈降量図」(縮尺200万分の1)である。
5. 用いた資料の精度から、市町村単位等の細かい単位で表示できる精度を有していない。
6. 深層崩壊の事例収集は現在も継続中であり、事例が追加された結果、図が示す範囲が変更される可能性がある。

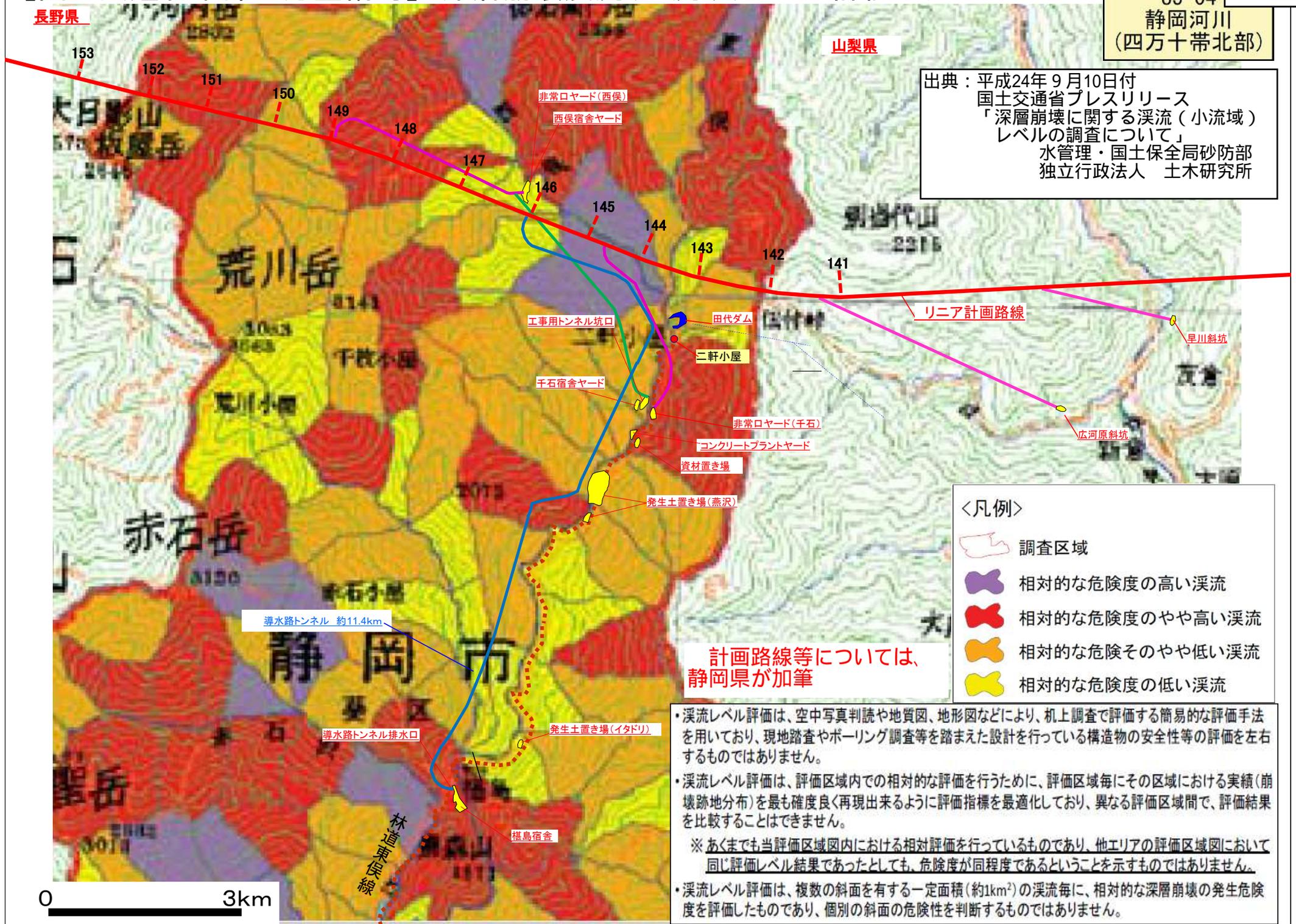


【国土交通省中部地方整備局】 深層崩壊溪流(小流域)レベル評価マップ

長野県

山梨県

出典：平成24年9月10日付
国土交通省プレスリリース
「深層崩壊に関する溪流(小流域)レベルの調査について」
水管理・国土保全局砂防部
独立行政法人 土木研究所



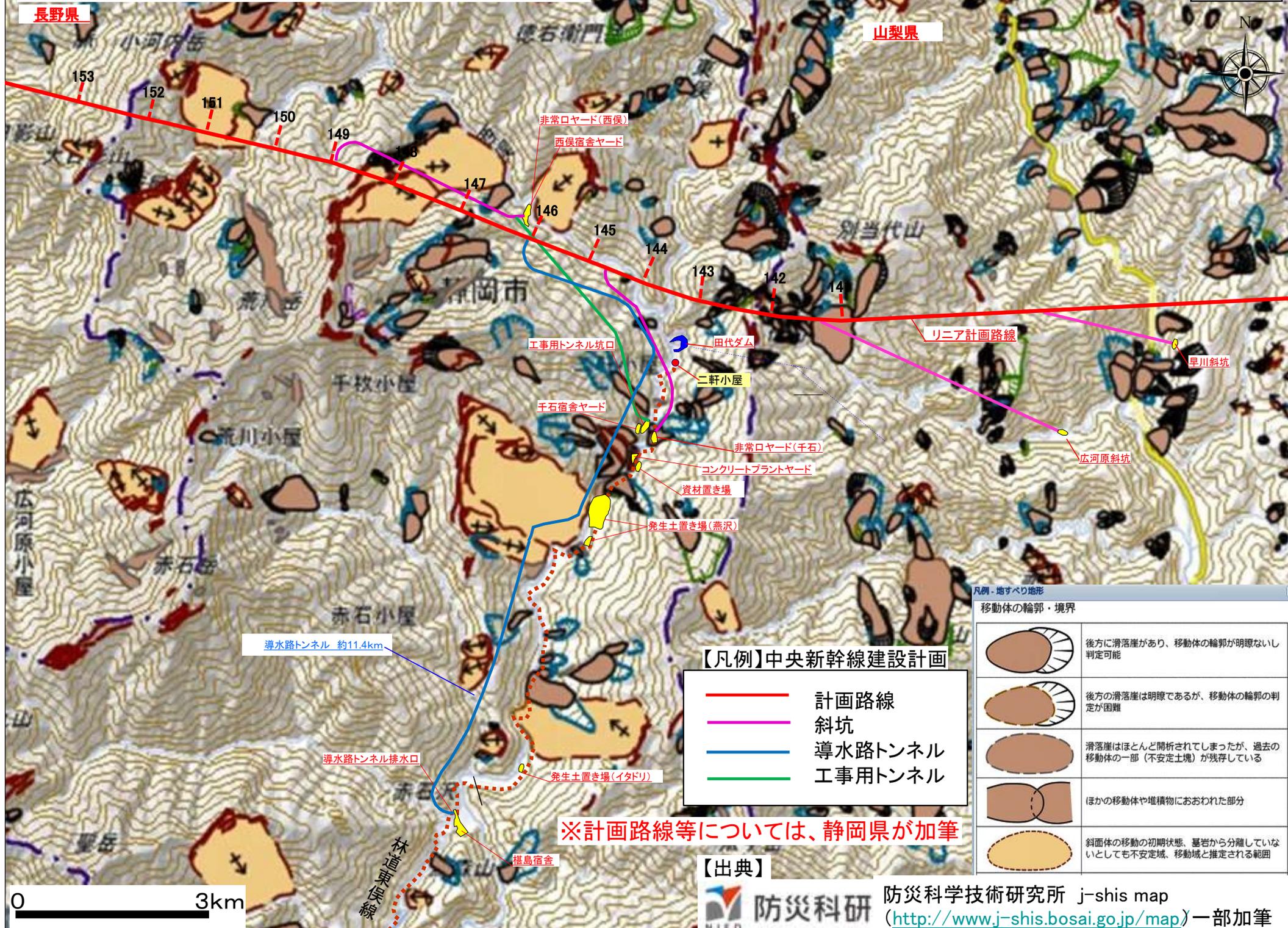
<凡例>

- 調査区域
- 相対的な危険度の高い溪流
- 相対的な危険度のやや高い溪流
- 相対的な危険度のやや低い溪流
- 相対的な危険度の低い溪流

計画路線等については、**静岡県が加筆**

- ・溪流レベル評価は、空中写真判読や地質図、地形図などにより、机上調査で評価する簡易的な評価手法を用いており、現地踏査やボーリング調査等を踏まえた設計を行っている構造物の安全性等の評価を左右するものではありません。
- ・溪流レベル評価は、評価区域内での相対的な評価を行うために、評価区域毎にその区域における実績(崩壊跡地分布)を最も確度良く再現出来るように評価指標を最適化しており、異なる評価区域間で、評価結果を比較することはできません。
 ※あくまでも当該評価区域図内における相対評価を行っているものであり、他エリアの評価区域図において同じ評価レベル結果であったとしても、危険度が同程度であるということを示すものではありません。
- ・溪流レベル評価は、複数の斜面を有する一定面積(約1km²)の溪流毎に、相対的な深層崩壊の発生危険度を評価したものであり、個別の斜面の危険性を判断するものではありません。

0 3km



非常口ヤード(西俣)

西俣宿舎ヤード

工事用トンネル坑口

田代ダム

二軒小屋

千石宿舎ヤード

非常口ヤード(千石)

コンクリートプラントヤード

資材置き場

発生土置き場(燕沢)

導水路トンネル 約11.4km

導水路トンネル排水口

発生土置き場(イタドリ)

榎島宿舎

【凡例】中央新幹線建設計画

- 計画路線
- 斜坑
- 導水路トンネル
- 工事用トンネル

※計画路線等については、静岡県が加筆

【出典】

凡例・地すべり地形

| 移動体の輪郭・境界 | |
|-----------|---|
| | 後方に滑落崖があり、移動体の輪郭が明瞭でないし判定可能 |
| | 後方の滑落崖は明瞭であるが、移動体の輪郭の判定が困難 |
| | 滑落崖はほとんど開析されてしまったが、過去の移動体の一部(不安定土塊)が残存している |
| | ほかの移動体や堆積物におおわれた部分 |
| | 斜面体の移動の初期状態、基岩から分離していないとしても不安定域、移動域と推定される範囲 |